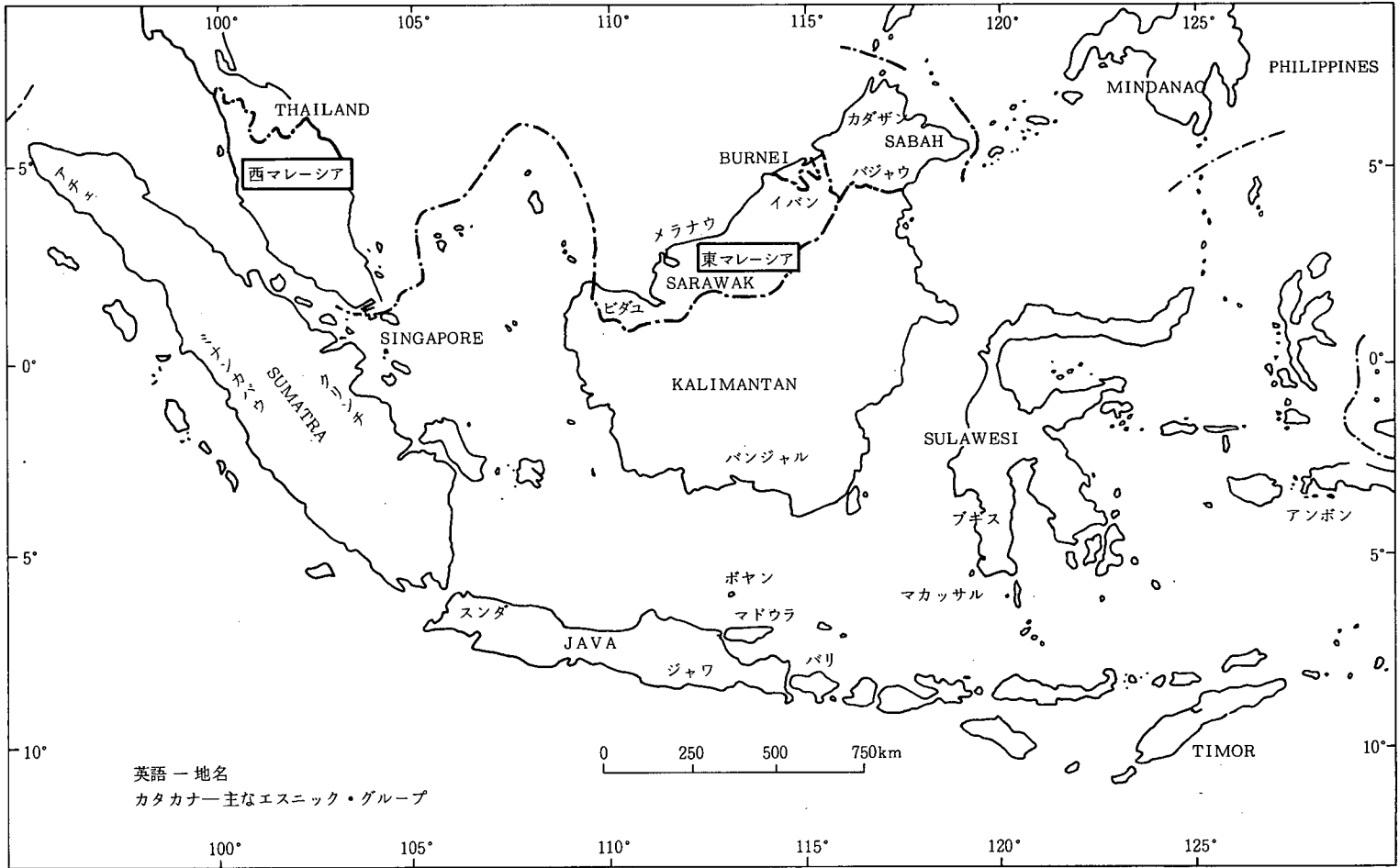
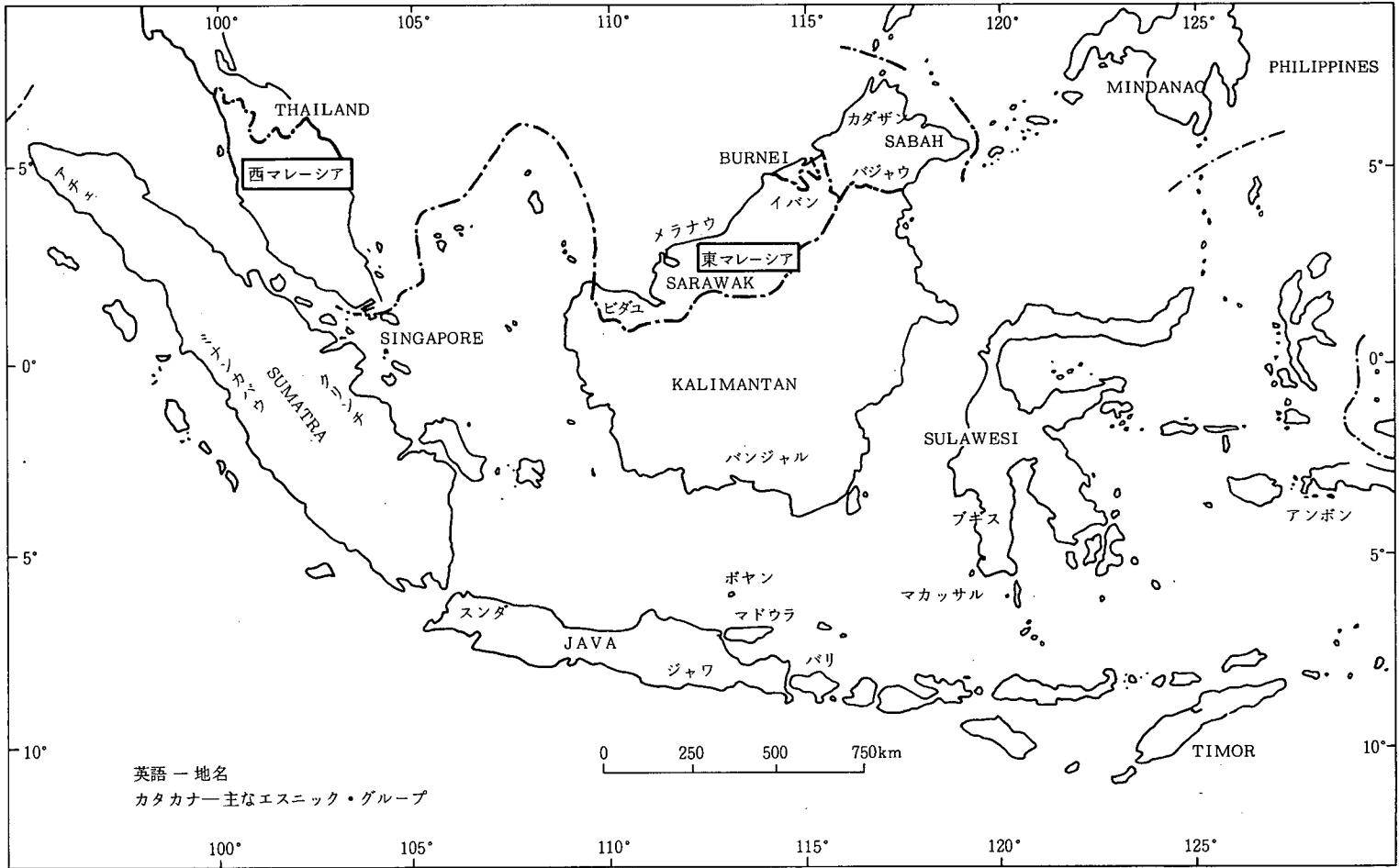


地図 東南アジア島嶼部と主なエスニック・グループの分布



誰がマレー人か

——マレーシアの人口統計からみた マレー人概念の成立と国民国家——

田村愛理

1. 理論的前提として
2. 多元社会マレーシアの歴史的背景
3. マレーシア人口統計の不可思議
4. 英領マラヤの人口統計と人種概念
5. 国民国家の形成と民族概念

1. 理論的前提として

本稿は、マレーシアの人口統計を通して、民族概念の変遷と固定化について分析するものである。

マレーシアは「マレー人」、「中国人」、「インド人」からなる典型的な多元社会であるといわれている。「多元社会 (plural society)」とはファーニバルによって概念化された、様々な民族的集団をもつ熱帯の植民地領域に特有な横に共通する意思を欠く、政治的、行政的に規定された縦割り社会であり、複合社会と訳されることもある⁽¹⁾。しかし、多元社会は熱帯の植民地領域に特有な現象ではなく、国民国家体制の生みの親であるヨーロッパにおいても広くみられる世界的な現象であることは周知されつつある。例えば、国民国家体制をもっとも早く始めた西ヨーロッパ諸国においても、イギリスの北アイルランドのカソリック-プロテスタント対立を始めとして、ベルギーのワルーン-フレミッシュ対立、スペインのバスク地方独立運動、フランスのオクスタニー地方復興運動等、政治的文化的多元社会の様相は枚挙に暇ない。また、ソビエト連邦における諸共和国の独立要求や、東ヨーロッパのチェコスロバキアにおけるチェク人とスロバキア人、ユーゴスラビアにおけるクロアチア系住民とセルビア系住民の対立等、国民国家内部の複合社会性による対立が深刻な問題として顕在化しつつある。

国民国家体制とは、何らかの文化的同一の紐帯に結ばれた人々が国民として、特定の領域を政治支配するというところにほかならない。このシステムができたのは、最も早いイギリスにおいても17世紀半ばであり、フランスにおいてこのシステムが確立するのはフランス革命の過程をとおしてであるから、18世紀末である。その他のヨーロッパ諸国がこの体制を確立するのは19世

紀に入ってからであり、このシステムがヨーロッパ諸国の植民地であった第三世界に確立されるのは、第一次世界大戦と第二次世界大戦後の独立運動を通じてである。ところが、20世紀も終わろうとしている今日、約二世紀にわたって圧倒的な影響力を誇った国民国家体制は、既存システムの内部と外部の両方から変更を迫られつつある。すなわち内部からは、この政治機構から疎外されていると感じている人々の集団からシステムの不平等是正の要求／分離主義が出され、外部からは、移民・難民の流入が激増し、多国籍企業のトランス・ナショナルな動きが活発化し、さらに地球規模における環境問題が顕在化しつつあるにつれて、固定した領域支配の不都合性の問題への対応が迫られているのである。すなわち国民国家システムは、国内の日常レベルの政治問題を解決するには組織が大きすぎ、地球規模での問題を解決するには組織が小さすぎるという矛盾に直面しているのである。

そこで、このような状況への対応として、国際政治の分析単位にたいする学問的再検討が二つの局面からはかれつつある。まず、国民国家システムの内部変化に着目している研究者からは、国際政治の分析単位を既存の国民国家にはない集団に求めようとする研究状況が、既に1970年代から始まっていた。これはエスニシティ理論と呼ばれ、近代化の進展にもかかわらず、原初的紐帯 (primordial sentiment) として存在し続けているエスニック・グループを社会の主要な構成要素としてとらえ、政治経済を分析しようとする立場である。しかし、これは言葉こそ「民族」から「エスニシティ」へと変化してはいるが、政治的利益集団の分析単位として宗教・言語等の文化的な共通感情を紐帯とした固定的なグループを想定し、その集団における政治的支配の正統性を訴えているという点では、国民国家システムの縮小版であるにすぎない。また、既存の国民国家内部における諸民族対立を、横に共通する意思を欠くと見なしている点では、ファーニバルの多元社会論の再解釈版であり続けている⁽²⁾。

つぎに、外部からの変化に注目した研究者達は、ヨーロッパ共同体形成のようなトランス・ナショナルな動きを強調し、国民国家システムは崩壊しつつあると指摘しているが、実体としては国民国家にかわるどのような新しい政治的秩序も生まれていないのが現状である。むしろ逆に、国際社会における発言力は国民国家としてのものに限定されており、NGOの影響力も国民国家単位の政治にしばられている。このような状況下において、多元社会の中から安定した国民国家を形成し、国際社会における発言力を強めていくということは、第三世界における多くの国々の現実の政治的課題の第一目標とされている。

従来のマレーシア研究は、そのほとんどがファーニバル流多元社会解釈またはその再解釈の枠組みの中でなされ、紹介されてきた。その結果としてわれわれは、マレーシアの基礎的社会構造として、イギリス帝国主義の植民地政策により、農村経済に逼迫させられている「マレー人」と商業・流通に活躍する「中国人」、プランテーション労働者としての「インド人」のイメージを抜き難く植えつけられている。そして、政治はこの三エスニック・グループの妥協と協商の文脈において語られてきた⁽³⁾。しかし、筆者はイスラーム圏におけるマイノリティ・コミュニティに研究の焦点を当ててきた道程で、エスニック・グループを「利益と感情的紐帯を結合しうる基底集団アイデンティティ」と固定化し、政治行動の分析単位とすることには疑問を感じてきた⁽⁴⁾。なぜなら、過去に筆者が研究したマレーシアのインド人グループの政治行動においても、ア・プリオリに想定されうるような固定化した実体としてのインド人グループなるものは存在しないからである。例えば、1920～30年代のマレーシアのインド人コミュニティの場合、その集団アイ

デンティティの核は初期にはマレー・インド人として自らを意識し、スルタンの臣民として市民権獲得運動の形をとっていた。そして、この要求がイギリス当局により、拒否されると、故国インドの独立運動に目が向けられ、その「利益と感情的紐帯を結合しうる基底的集団アイデンティティ」は、インド国民会議派を母体として希求する。この希求も当の母国インドから拒否されると、次のナショナリズムの心理的核はタミル文化へと変化していったのである。このような多元社会マレーシアを構成する三民族の一つとしてあげられるいわゆる「インド人」というエスニック・グループのシンボルは現実には政治社会状況に応じて、「スルタンの臣民」——「インド国民会議派」——「タミル文化」と変容しており、当然そこに結集する人々の内容も時期によって異なっている。「インド人」は決して政治的にも文化的にも一枚岩的で固定化したエスニック・グループではないのである。むしろ、「インド人」という概念が固定化していくのは、独立後のマレー人主体の政治組織の統一マレー人国民組織 (UMNO)、「インド人」の利益代表としてマラヤ・インド人会議 (MIC)、中国人の利益代表としての馬華公会 (MCA) の三政党からなる連合政治体制の中においてなのである⁶⁾。

以上、本研究の理論的前提を述べてきたが、本論に入る前に以下のことを再確認しておきたい。まず特定の民族／エスニック集団の概念とは、政治社会状況の変化による可変的な概念であることである。そして、ある特定の時期に、特定の文化的集団概念が強化され、固定化されていくのは、政治経済状況の変化の中におけるア・プリオリな原初的感情の自然的発露というよりは、その時の政治的エリート集団が作っている行政制度との関係が深いこと、である⁶⁾。では、マレーシアにおいて「マレー人」「中国人」「インド人」という概念はいつごろ登場したのであろうか。「インド人」の登場がイギリス植民地政策と密接に関連していることは前述したが、ホスト民族としての「マレー人」はすでにこの時一枚岩的なエスニック・グループとして成立していたのだろうか。もしかしたら、「マレー人」も「インド」同様ア・プリオリな概念ではないのではなかろうか。本稿は以上の問題意識に沿って、近現代における第三世界における国民国家体制の創出と民族概念の形成との関連を、マレーシアの人口統計から読み取ってみようとするものである。

2. 多元社会マレーシアの歴史的背景

現在のマレーシアはマレー半島に位置する西マレーシアと、半島から南シナ海を 640 キロメートル隔てたボルネオ島北部に位置する東マレーシアとの二つの地理的に離れた領土からなる人口約 1500 万人の連邦国家である。この連邦は 1957 年にイギリスから独立したマラヤ連邦とシンガポール自治領、ブルネイを除く英領ボルネオの合併により 1963 年に成立したが、1965 年にシンガポールが分離独立したため、現在はマレー半島の 11 州とボルネオのサバ・サラワクの 2 州からなる。

マレー半島は古くから東南アジアの重要な貿易拠点であり、7 世紀にはスマトラのシュリーヴィジャヤ、13 世紀にはジャワのマジャパヒト王国等の海洋国家の支配の影響下にあった。しかし、今日のマレー人社会の文化、政治の原型となったのは 14 世紀に成立したムラカ王国だといわれている。ムラカ王国はマレー半島における初めての統一王国であり、イスラーム教とマレー語およびスルタン制という文化的政治的遺産を残したが、16 世紀にポルトガルにより滅ぼされた。以後この地域ではポルトガル (1522-1641)、オランダ (1641-1824) が覇権を争った。一方

マラヤ半島内部では、18世紀にはジョホール、パハン、ペラの諸スルタン領、シャムのアユタヤ王国の保護下のクランタン、トレンガヌ、ケダの諸スルタン領が分立していた。

英蘭戦争に勝ったイギリスは18世紀半ばから東南アジアに進出し始める。そして、18世紀末～19世紀初頭にかけて、ペナン・シンガポールの両港をケダ、ジョホールのスルタンから、マラッカを英蘭条約によりオランダから手に入れ、これらをイギリス東インド会社の直轄地とした。1858年の東インド会社が解散すると、1867年に三港は海峡植民地 (Straits Settlement: SS) とされ、ここを足場にイギリスはマレー半島内部に進出し、諸スルタンから実質的な支配権を奪い、1896年にはペラ、スランゴール、ヌグリ・スンピラン、パハンの四スルタン領をまとめてマレー連合州 (Federated Malay States: FMS) を形成したのである⁽⁷⁾。

現在のマレーシアの社会経済構造は、この時から第二次世界大戦後まで続いたイギリスの植民地経済の要請にもとづいて、19世紀末から20世紀初頭にかけての時期に形成されたのである。イギリスにとってのマレー半島の魅力はその経済的位置の高さにあり、中でも注目されたのが錫とゴムである。そして、錫鉱山の開発に伴って中国人が、ゴム・プランテーション開発に伴ってインド人の移民が促進された。イギリスの植民地政策は、次のように特徴づけられよう。政治的支配の道具として、スルタンとその回りのマレー人封建エリート階層をイギリス行政機構の官吏として位置づける一方、スルタンとマレー農民のパトロン＝クライアント関係を利用し、マレー人の活動を農村経済に固定する。錫鉱山開発には、中国系労働力を集中するとともに商業・流通過程における華僑勢力を利用する。ゴム・プランテーションには、タミル系労働者を投入する一方、下級官吏として英領北インド系の人々を使用する。このように、19世紀末から20世紀初めにかけて英領マラヤの植民地政治経済構造は、コミュニティ別に分断された形で成立したのであった。そしてこの構造は、第二次世界大戦と日本の占領を経たのち独立した、国民国家マレーシアの基本社会構造として引き継がれたのである。

第二次世界大戦後、中国人を中心として台頭してきたマラヤ共産党に対して、独立後も権益の保持をめざすイギリスと伝統的政治支配の維持をはかり、統一マレー人国民組織 (UMNO) を結成したマレー人封建層との妥協の上に、1948年マラヤ連邦が結成された。その後、マラヤ共産党がイギリス軍の弾圧によりしだいに力を失っていったのに対して、統一マレー人国民組織 (UMNO) は、1954年にインド人会議 (MIC)、馬華公会 (MCA) と連合党を結成して、立法議会選挙で勝利をおさめた。連合党政権のもとで、1957年にマラヤ連邦は英連邦内の独立国としての地位を獲得したのである。

1961年にマラヤ連邦は、マラヤ連邦とシンガポール自治領、英領ボルネオ (サバ・サラワク・ブルネイ) の三地域を統合するマレーシア連邦案を提唱し、1963年にマレーシアが結成された⁽⁸⁾。しかし、二年後の1965年にシンガポールは中央政府のマレーシア形成に対する政策に反発して分離独立した。このような政情不安定のもとにおこなわれた1969年の選挙で連合党が後退すると、中国系野党の進出を誇示しようとする中国系住民とマレー人との間に人種暴動がおり、全土は非常事態宣言におかれた⁽⁹⁾。

翌1970年には国家の安定をはかるための国家五原則 (ルクヌガラ) が発布され、1. イスラムは連邦の公式宗教、2. 国王および国家への忠誠、3. 憲法の遵守、4. 法による統治、5. 良識ある行動と徳性、が定められた。そして連合党政府はマレー系、中国系の野党をも取り込んで国民戦線を結成し、1974年の選挙で圧倒的勝利をおさめ、今日にいたる政治基盤を築いたのである。

3. マレーシア人口統計の不可思議

独立後のマレーシアの大規模な国勢調査の記録は、1970年と1980年に Population and Housing Census としてまとめられている。これらの記録をみ、多元社会マレーシアにおける「マレー人」の人口割合について調べていこうとするものは、「マレー人」をめぐる解釈の迷宮の中に踏み込んでしまうことにすぐ気付くであろう。特に民族別人口統計の部門は、推理小説を愛好するものにとって謎解きの格好の素材を提供している。この二つの統計を比較してみると、次の点で明らかな矛盾が見られる⁽¹⁰⁾。

①1970年のセンサスでは、Community Group (Gulongan Masharakat) の巻がまとめられている。しかし、1980年のセンサスでは Community Group の巻は発行されず、民族別統計は General Report の Population Size and Structure の項の一節に、Ethnic Composition として数頁にわたり述べられているのみとなっている。

②1970年の Community Group (Gulongan Masharakat) の巻では共通の言語・宗教・慣習・または忠誠の紐帯によって結ばれた人々のグループの呼称として、植民地時代の race = bangsa に代わって、community = masharakat 語が使われ、用語変更の理由が述べられている。しかし、1980年のセンサスでは全く同じ定議の下に、community に代わって ethnic group = kumpulan ethnisk が用いられ、用語変更の理由は述べられていない。

③1970年の Community Group (Gulongan Masharakat) の巻では、全マレーシアの人口構成比率が三大コミュニティ・グループ（マレー人・中国人・インド人・その他）の別に挙げられている。1980年のセンサスでは、コミュニティ・グループに変わってエスニック・グループという言葉が使われ、マレーシア全土のエスニック・グループ別構成については述べられておらず、エスニック・グループ別人口構成比率は、半島マレーシア、サバ、サラワクに分けられた統計のみとなっている。

④サバ、サラワクに注目してみよう。70年にコミュニティ・グループ (Masharakat) の名称の下に大カテゴリーとしてあげられているのは、サバでは、「カダザン」、「ムルット」、「バジャウ」、「マレー人」、「インドネシア人」、「その他オラン・アスリ(先住土着民)諸部族」、「中国人」、「その他」であった。80年にエスニック・グループ (Kumpulan ethnisk) の名称の下に大カテゴリーとしてあげられているのは、「プリブミ」、「中国人」、「インド」、「その他」である。70年の大カテゴリーであったカダザン、ムルット、バジャウ、マレー人、インドネシア人、その他オラン・アスリは、「プリブミ」のサブ・カテゴリーとなっている。また、70年には、「その他」のカテゴリーのサブ・カテゴリーであったサバのサラワクのフィリピン原住民、ココス島人も「プリブミ」のサブ・カテゴリーとなっている。逆に70年では「その他」のカテゴリーのサブ・カテゴリーであったインド人は、80年には大カテゴリーとして独立している。

サラワクでは、70年のセンサスの大カテゴリーは、「マレー人」「メラナウ」「海陸ダヤク」「その他オラン・アスリ」「中国人」「インド人」「その他」であった。80年センサスでは、こちらは、「マレー人」「メラナウ」「イバン(海ダヤク)」「ビダユ(陸ダヤク)」「その他オラン・アスリ」「中国人」「インド人」「その他」に変化している。その結果70年センサスでサラワクの39.6%を占めていたダヤク族は二つに分割されてしまった。一方、半島マレーシアのエスニック・グループの

大カテゴリーは70年、80年の両統計ともに「マレー人」「中国人」「インド人」「その他」に分類され続けている。

⑤ところで、70年センサスでも80年センサスでも半島マレーシアの「マレー人」という大カテゴリーに含まれているのは、「マレー人、インドネシア人、オラン・アスリである。」と規定されている。一方、70年のサバ、サラワクの統計ではマレー人と両地域のオラン・アスリ諸族、インドネシア人は、別々の大カテゴリーとして独立しているのである。さらに、80年のサバのセンサスでは、「マレー人」は大カテゴリーとして残されることもなく、「プリブミ」という新しい名称の大カテゴリーがマレー人とオラン・アスリ諸族、インドネシア人を含める名称として登場しているのである。(表1参照)

さて、これらの比較をとおして浮かんでくるマレーシアの人口統計の最大のミステリーは、「一体マレー人とは何者なのであるのか。」という疑問に集約される。もう一度整理してみよう。このミステリーの主人公である「マレー人」は、半島マレーシアではエスニック・グループ（またはコミュニティ・グループ）の大カテゴリーとして分類され、その中には、インドネシア人および半島在住の諸オラン・アスリ部族を含むものとして規定されている。一方サラワクの「マレー人」は、マレー人のみを表し、その中にインドネシア人やオラン・アスリを含まない。また、サバでは、マレー人は、プリブミというエスニック・グループのサブ・カテゴリーである。このように一口にマレー人といっても、エスニック・カテゴリーとしての「マレー人」と、サブ・カテゴリーの中のマレー人がいて、マレー人という実体はその両者の間を場所によって伸び縮みしていることがわかる。マレー人カテゴリーのこの変幻自在の特徴は、「中国人」「インド人」カテゴリーと比較してみるとよくわかる。中国人は、「中国人」の大カテゴリーの下に福建、広東等出身地方別のサブ・カテゴリーに分類されている。インド人もまた統計的に極めて少数の場合にはその他のサブ・カテゴリーとなっているが、基本的には中国人の場合と同様に、「インド人」の大カテゴリーの下にタミル、パンジャビー、マラヤリ等の出身地方別のサブ・カテゴリーに分類されている。両者ともサブ・カテゴリーの福建人やタミル人が大カテゴリーに変身している事例はない。

また、サバで「プリブミ」の名称のもとにカテゴライズされている人々（マレー人、インドネシア人、諸オラン・アスリ部族）は、半島マレー人における「マレー人」というエスニック・カテゴリーの規定と全く同じであるという事実も興味深い。

以上の諸点からみると、「マレー人」とは、半島マレーシアにおいては、その中にインドネシア人、諸オラン・アスリ部族を含む人々であり、その同じ「マレー人」は、70年のサバ・サラワクにおいては、インドネシア人、諸オラン・アスリ部族と別個の存在であり、80年のサバにおいては「プリブミ」の一部である。つまり、「マレー人」とは、時と場所により多層な人々から形成されている集団である事が理解される。

このようなマレー人概念の変幻自在さは、今日のマレーシアのマレー人をめぐる政治状況と切り離しては考えられない。今日のマレーシアは、再三述べているが、マレー人、中国人、インド人からなる多元社会／複合国家と理解されている。そして、現在のマレー人エリートを中心とした政府は、イギリス植民地政策により近代的産業構造から分離されていたために、中国人、インド人に比して格段に低いマレー人の経済的地位の向上をその政策の中心としている。すなわち、

マレーシアにおいてマレー人と認められた者は、憲法第 153 条により、1. 公務員採用の際の割当、2. 特定業種にたいする許可の優先割当、3. 奨学金等の教育援助の優先給付、等の特権が与えられることになる。また第 89 条によりマレー人は、マレー人保留地の土地所有権の保証が与えられている。そして、これらマレー人特権／保護政策は、サバ・サラワクの先住土着諸民族にも適応されることになっている。さらに、1971 年からはじまった新経済政策 (NEP) においても、これらの人々は移民であった中国系やインド系マレーシア人たいてはブミプトラ (Bumiputra = 土着の子) と呼ばれ、優遇措置を受けられることになっている。したがってマレーシアの政治の中で、このような優遇を受ける資格のある「マレー人」とは誰であるのかが大きな問題となり、マレーシアの政治は「マレー人とは誰か」をめぐる展開されているといっても過言ではない。

現在マレーシアの憲法の中で、マレー人は次の如く規定されている。『「マレー人」とは、イスラーム教徒 (ムスリム) であり、日常マレー語を話し、マレーの習慣に従い、そして (a) ムルデカ (マラヤ連邦独立記念日) 以前に連邦あるいはシンガポールに生まれた者、もしくは両親の一方が連邦あるいはシンガポールに生まれた者の子、またはムルデカの日以前に連邦あるいはシンガポールに居住していた者、(b) そのような条件を備えた人の子孫、を意味する。』(憲法第 160 条の 2) 即ち、「マレー人」とは宗教的にはムスリムで文化的にはマレーであるような存在であり、イスラームとマレー性という二大シンボルによりはっきり規定されているのである。しかし、この単純すぎるマレー人定義は、いざ現実にマレーシアの社会の中で生きている人々に適用しようとすると、様々な矛盾を抱え込んでしまうのである。実際にマレーシアに生きる人々の中で、優遇されうるマレー人やブミプトラは誰で、排除されるべきなのは誰なのかということが、この定義だけでは明確にしきれないのである。例えば、ムルデカの日以前からマレー半島に在住しており、マレー語を日常的に話し、中国よりはマレーの習慣に大きな影響を受けている移民二世や三世の中国系の人々が、マレー人特権を適用されるために続々とイスラームに改宗するという現象が 1970 年代始めに生じた。一般にソウダラ・バル (Saudara baru = 新兄弟) と呼ばれるこのような人々が「我々も憲法のマレー人条項を満たしているマレー人である。」としてマレー人優遇政策の適応を求め、裁判に訴えたことがあった。裁判の結果、彼らは「マレー人ではない。」と判定されたが、その理由は述べられないままであった⁽¹¹⁾。すなわち、かれらの自意識とは別に、かれらはいくまで「マレー人」とは違う人々「中国人」にカテゴライズされて、土着の人々とは認められないため、ムスリムでもなくマレー語も話さないオラン・アスリ諸族も享受できるマレー人／ブミプトラ優遇政策は適用されないのである。むしろ逆に、経済的に既に優越していると考えられている中国系マレーシア人をマレー人優遇政策から排除するためには、憲法の定義を満たしていたとしても、中国系マレーシア人はあくまで「中国人」にカテゴライズされざるを得ないのである。

一方、1970 年代からマレー人の間で起こり始めたイスラーム原理主義運動の興隆の中で、正統イスラームの追求とともに、しきりに真のマレー人であるべきこと (Mulayu jati = pure Malay) が問われるようになってきた。この運動の中で憲法上のマレー人定義はさらに真のマレー人=真のムスリムに純化され、マレー人の中で誰がこの真のムスリムで、誰が異教徒 (カーフィル) なのかをめぐる、マレー系の与党 (UMNO) と野党のイスラーム党 (PI) の政治紛争が展開されているのである⁽¹²⁾。

以上の事実を考えてみると、憲法における「マレー人」定義は、一部のマレー人学者が主張するように、「全てのマレーシアのムスリムを包含する概念である」と理解するのは困難である⁽¹³⁾。むしろ、現在のマレーシアの政治状況の中で「マレー人」カテゴリーは包含概念としてよりは、中国人排除の民族概念として機能していると理解すべきであろう。そのように理解すると、前述の人口統計におけるマレー人ミステリーがきれいに解決できるのである。すなわち、半島マレーシアにおいて「マレー人」が諸オラン・アスリ部族、インドネシア人を含むのは、マレーシアの政治中心たるマレー半島内における「マレー人」の人口を「中国人」にたいして少しでも多くしたいためにほかならない。サバで70年には「マレー人」だったカテゴリーが、その定義内容は同じままに80年には「プリブミ」という名称に変わっているのは、「プリブミ=土着民」というオラン・アスリとマレー人両者の共通項による苦肉の用語を採用する事により、サバにおけるマレー人人口の少なさを目立たなくするためであろう。「マレー人」「プリブミ」いずれのカテゴリーをとるにしても、近代以降の移民であった「中国人」「インド人」がここに含まれない概念であることが重要なのである。また、サラワクの統計において、「プリブミ」が使われなくて、「マレー人」が残り、かわりに「ダヤク族」人口が「イバン」と「ビダユ」に分割され、全体として減少したのは、サラワク州においてキリスト教徒のダヤク族が、中央のUMNOからの政権奪回をめざして政治運動を続けている状況を考えてみると、その意味するところが明白であろう。

このように「マレー人」優遇政策の推進と関連して、人口統計上のカテゴリー概念がいかに政治的影響を及ぼすかを考えてみると、70年に行われていたコミュニティ別人口統計は、マレーシアの政治上の最も過敏で脆弱な部分に触れることになるわけである。したがって、コミュニティ/エスニック別人口統計が、80年には公表されていないのも当然であるし、70年統計のコミュニティ・グループが80年にエスニック・グループに変更された理由が述べられていないのもうなずけよう。マレーシアの70年と80年の人口統計を比較してみると、現在この国の政治の中心課題である、「国民国家マレーシアにおける『マレー人』とは誰なのか」という問題が浮き上がってくるのである。

70年、80年の人口統計をとおして「マレー人」概念の恣意的性格をみてきたが、それでは独立以前には「マレー人」とはどのような人々をさす用語として成立していたのか、次節ではイギリス植民地時代からの人口統計に遡って調べてみたい。

4. 英領マラヤの人口統計

現在の多元社会アレーシアの社会構成の直接の責任がイギリスの植民地政策にあることは先に述べた。しかしここで忘れてならないのは、実際にはイギリスの進出以前からすでにマレー半島には多元社会が誕生していた事実である。歴史的背景の節で述べたように、マレー半島は古くからアジア貿易の重要な拠点であった。7世紀のシュリーヴィジャヤも13世紀のジャワのマジャパヒト王国もアジア交易を基礎とした海洋国家であった。14世紀のムラカ王国の繁栄も、当時すでにインドと中国を結ぶアジア交易の航路としてスマトラとマレー半島間の海峡が重要であったからこそ成り立ったのであり、この王国の基礎が海洋交易にあったことは間違いない⁽¹⁴⁾。マラヤ半島の海岸線の港には、マラヤ、スマトラ、ジャワ、南インド、中国、アラビアを結ぶ中国系、インド系、アラブ系、マレー系等様々な商人達が、季節風に乗って出入りしていたのであ

る。ポルトガル、続いてオランダの侵入はまさにこの航路の掌握を目指したものであった。しかし、19世紀までのヨーロッパ諸国のこの地における政策は重商主義的なものであり、点(港)の支配にとどまっていた。マラヤ、スマトラ、ジャワ、セレベス地域の内部は厚いジャングルに覆われた人口の希薄な地域であったが、河口沿いの交易とともに次第に米作農業が発展していき、マレー、シャム、アチェ、ミナンカバウ、ブギス等の諸勢力の対立抗争が続けられていた。19世紀にこの地域に進出してきたイギリス人がマラヤ海峡で発見したのは、実に様々な種類の人々がそこにいるという事実であった。

フランス・ライトが1786年にペナン島に上陸し、ここを東インド会社の拠点の一つとして開発を始めた当時、この島の人口は希薄であった。しかし、ペナン島が貿易港として発展し始めると徐々に人口が増し、約半世紀後の1835年には4万人を数えるに到った。

海峡植民地(SS)の最初の人口統計は1871年にとられた。その後、1881年、1901年、1911年に統計がとられたが、1901年、1911年からは、マレー連合州(FMS)の人口統計がこれに加わり、1911年からはさらにいくつかの非マレー連合州の人口統計が加わった。英国領マラヤとして統一された人口統計は、1921年からはじまり、1931年、1947年とある。そして、独立前の1957年にはシンガポールを除いたマラヤ連邦の人口統計が作成されている。さて、独立以前の人口統計で興味深いのは、なんといっても、既に様々な人々の集団が住み着いていた当時のマレー半島において、これら多種多様な人々がどのように把握され、記録されていたのかという事である。それは当然ながら、当時の人口統計の作成者であるイギリス人官僚の人間集団の分類にたいする意識と密接に関係してくる。このような観点から独立以前の人口統計のカテゴリーについて、ハーシュマンが詳細に検討しているので、彼の研究にそって1871年から1957年の統計について簡単にまとめてみたい⁽¹⁹⁾(表II参照)。

1871年の海峡植民地の人口統計のカテゴリーは、まず欧米人から始まる。「欧米人」の次には「アルメニア人」、そして「ユダヤ人」、「ユーラシアン」と続く。その後は、アジア系の人々の集団が、「アビシニアン」から「シンハリーズ」まで、アルファベット順に23のグループにわけられて記載されている。しかし、どのような基準でこれらのエスニック・グループを区別したのかについては述べられていない。

1881年の統計は、1871年の統計で使われたエスニック・グループを基本的カテゴリーとしているが、中国人の分類が細かくなり、方言別にグループに分けられている。さらに、こうしたエスニック・グループを表す言葉として、始めて「ナショナルリティ」という言葉が使われた。1891年の海峡植民地の統計では、「ヨーロッパ人」、「ユーラシアン」、「中国人」、「マレー人および島嶼部の原住民」、「タミール人および他のインドの原住民」、「その他のナショナルリティ」というようにグループを分別する大カテゴリーが用意された。そして、これらのグループのカテゴリー化に際しては、「ナショナルリティ」と「レイス」という言葉が併用して使われた。

1901年の海峡植民地とマレー連合州の統計のカテゴリーは、1891年のものを踏襲したものであるが、分類の基準を表す言葉としては、「ナショナルリティ」よりも「レイス」を使う方がふさわしいとその理由が述べられ、マレー連合州の統計では「レイス」というカテゴリー概念が用いられた。次に1911年の統計であるが、海峡植民地の統計はヨーロッパ人を含めて、アルファベット順のグループ別統計をとったが、中国人、インド人に関しては、従来の方言グループ別ではなく、マラヤ現地生まれか、中国本土生まれに分けた統計をとった。しかし一方、同年のマレ

一連合州の統計は、「ヨーロッパ人」、「マレー人」、「インド人」、「その他」というカテゴリーのもとに「レイス」別統計をとった。さらに中国人に関しては、「トライブ」という言葉を用いて従来通りの出身地方別によるサブ・カテゴリー統計をとった。

1921年の統計は、前回のマレー連合州の統計の形式と概念を受け継ぐものであった。そして、基本的にはこの形式と概念が、次のような若干の修正を受けながら、1980年の統計まで続いていくのである。1931年の統計から1957年の統計では、新しい用語として「マレーシアン」というカテゴリーが使われたこと。これは、マレー人とインドネシアおよびボルネオ島からきた人々を指し示すカテゴリーとして使われたが、1963年にマレーシアが独立した時点で「マレーシア」が新設の国民国家の名称として新しい意味を帯びたので廃止された。また「アボリジニー」の用語であるが、1881年から1911年にはアボリジニーというカテゴリーが独立していたが、次第に「マレー人」のカテゴリーの中に含まれるようになった。1911年から1931年には同じ意味で「サカイ Sakai」という語が使われたが1947年と57年には、再びアボリジニーが使われるようになった⁽¹⁶⁾。一方「中国人」というカテゴリーとそのサブ・カテゴリーの用法は殆ど変わっていない。1911年の海峡植民地の統計で「中国人」のサブ・カテゴリーを「海峡生まれ」と「中国本土生まれ」に分別したのは例外となっている。「インド人」のサブ・カテゴリーはもっと目茶苦茶で、時により宗教別にとらえてみたり、地方別にとらえてみたりで一貫していない。例えば、パンジジャブ地方のシーク教徒は、宗教別に統計をとった時はシークとなるが、地方別にとるときにはパンジャビーとして統計に表れることになる。

さて、次にイギリス人統計官はどのような分類概念によって、東南アジア島嶼部の多種多様な人々の集団を分別しようとしたのであろうか。まず、初期の統計においては、民族のカテゴリーの仕方は全く恣意的であり、どのような概念に基づいてこれらのカテゴリーを用いたのかについての記述はない。1881年の統計から人種グループをあらゆる概念として「ナショナルリティ」が用いられた。1891年の統計では「ナショナルリティ」と「レイス」という言葉が併用されており、1901年の統計では海峡植民地の統計は、アルファベット順のグループ別統計がとられ、マレー連合州の統計では、「レイス」別統計がとられた。そして、例外的に、1947年の統計にコミュニティという言葉（言語・宗教・習慣・忠誠）が使われた以外、この「レイス」別統計形式が以降の統計に受け継がれていくのである。これら統計のカテゴリーは当然、その作者である20世紀初頭のイギリス人官僚の「民族」概念を反映したものである。1931年の統計官は次のように述べている。

「マラヤの人口統計で用いられている『レイス』という用語は特殊なので、これには説明を要する。レイスという用語でされる質問の結果から得ようとしている情報は、様々な目的にとって重要なものである。「レイス」という語が使われるのは、もっと適切な用語がないためで、これは複雑な概念をカバーしており、厳密で科学的な意味でのレイスはその一部にすぎない。行政官とか商人にとって、エスノグラフィックな意味におけるレイスの概念で人間集団の分類をしようとしても無益である。勿論そのように分類しようとしても当然論争がおきる。「ナショナルリティ」によるグループ分けの試み、もっと正確には政治的忠誠や国籍によってのグループ分けの試みは、同じように論争的となるであろうし、全くと言っていいほど実際の価値はない。実際人口統計をとるために用いられている「レイス」という言葉を定義するのは不可能である。それは現実

には、実際の目的のために、地理的またエスノグラフィックな出自、政治的忠誠や人種的社会的亲近性や共感等、様々な考えを混合したものなのである。科学的で論理的に一貫した分類を達成しようとする困難さは、殆どのオリエントの人々がレイスに対するはっきりした概念を持っていないという事実によっていや増すのである。かれらは、宗教こそ決定的ではないにせよ最も重要な要素であると思っているのである。例えばマレー人は、ヨーロッパ人がレイスの区別とみなしているのと全く同じ様相を宗教的区別とみなしているのである。そしてムスリムのインド人とヒンドゥー教徒のインド人の差を、例えその二人が同地方の出身者としても、フランス人とドイツ人の間の違いと同じ位重要な違いとみなすのである。同様に、ヨーロッパ人がインド人とマレー人の混血とみなしている「ジャウィ・ベカン」という言葉も、実際にはしばしばマレー人の血を全くひいていなくても、結婚してマラヤに到着したインド人ムスリムを指しても使われているのである。(略)

「この報告で用いられている「レイス」という語の定義に似たものが(マレー語に)ないので、簡潔にその意味を伝えるのに最も良い方法は、個人に「あなたのレイスは何ですか。」と聞くことで、調査官は我々が日用会話の中で普通「あの人は誰ですか。」と聞いて聞くときに期待しているような答え、それが職業を聞いているのではないことを文脈の中ではっきりさせながら、を得るように努力している。このような状況下で我々は、驚かされもし、またいらいらさせられるのもあるが、例えば、マドラス地方のインド人について、彼がタミルかトゥルグカを知りたいのに、イギリス人またはドラビダ人だとの答えを得るのである。しかし考えてみれば、これらの答えのどちらかは、正しいのかも知れない。また、ある白人がアメリカ人かカナダ人かオーストラリア人かあるいはイギリス人かを知りたいのに、チュート・ケルト人であるという答えを得たりしてびっくりする事もある。(略)」⁽¹⁷⁾

以上ハーシュマンの論文にそって独立以前の人口統計についてみてきたが、カテゴリーについて次のような特徴が浮かび上がってくる。すなわち、初期の人口統計のカテゴリーについてはなんらの合理的説明もないことと、20世紀に入ってから当初は「ナショナルリティ」「レイス」と逡巡しつつ、次第に「レイス」別統計に統一されていったことである。ハーシュマンは、その解釈として、ヨーロッパ人が考える意味でのレイスが存在しないことに戸惑ったイギリス人統計官が、当時のマレーシアの現実というよりは、イギリス人の「レイス」概念に適應したカテゴリーを選択した結果であると述べ、さらにイギリス人統計官のレイス意識は、19世紀末からのヨーロッパにおける社会進化論の概念を反映したものであると指摘している。また、「レイス」概念は19世紀後半と20世紀前半では変化しており、この変化はヨーロッパ帝国主義の役割の変化と結びついて発展したものである、と述べている。すなわち「レイス」概念は、植民地現地への本国からの資本投下が盛んになり、イギリス帝国主義が最盛期に入った20世紀初頭から一般化した思想であり、それまで漠然と何となくヨーロッパ人を頂点として表していた統計の分類に科学的背景を与えるものとなったのである。「レイス」概念の成立はイギリス帝国主義の最盛期に、ヨーロッパを頂点とした社会進化論のヨーロッパにおける定着とともに強化されたものなのである。ハーシュマンはさらに、「怠け者のマレー人」という神話が醸成されるのも、20世紀に入ってから新しい現象であったとしている⁽¹⁸⁾。

ヨーロッパ人達を頂点として、まだその文明に域に達していない人々を漸次並べていくという

作業に、20世紀初頭の社会進化論は合理的の説明を与えたというハーシュマンの解釈に私も基本的には同意するものである。しかしながら、私は次のことをさらに付け加えたい。1931年のセンサスで「レイス」概念採用の弁を記した、イギリス人官僚の言は、当時「レイス」という用語を使って彼が把握しようとしていたものが、今日理解されるようないわゆる生物学的な「レイス」というよりは、むしろ現在の「国民国家」的な概念であったということを明瞭に示している。この、個人的には誠実らしい悩めるイギリス人の頭の中には、「あなたは誰だ?」と聞かれた時の自然な答えとして、「チュートン民族」ではなく、「イギリス人」「フランス人」「オーストラリア人」「アメリカ人」という確固たる国民国家へ帰属するアイデンティティが自明なものとして組み込まれているのである。当然の事ながら、こうした政治的枠組みと個々人のアイデンティティの一致という概念をまったく持ち合わせていなかった当時の東南アジア島嶼部の人々とイギリス人調査官の問答は、長屋の御隠居さんと熊さんのそれぞれの常識によるずれた問答とならざるを得ない。したがって独立以前のマラヤ連邦の人口統計のカテゴリーは、イギリス人官僚の人種概念の反映というよりは、「レイス」という用語を用いてはいるが、むしろ当時のヨーロッパ人のアイデンティティの基盤となっていた「国民国家」概念の反映だと解釈したほうがより当時の意識に即しているのではないだろうか。「レイス」と「ナショナリティ」の間をカテゴリー用語が行き来したことや、ユダヤ人、アルメニア人という国民国家を持たないグループがヨーロッパ人の中で一番下に分類されているのも、こうしたアイデンティティ概念の反映ではないか⁽¹⁹⁾。

5. 「国民国家」の形成と民族概念

以上、独立後と以前のマレーシアの人口統計について述べてきた。現在のマレーシアの人口統計は、基本的には1921年のイギリス植民地時代の統計形式を踏襲している。独立後のセンサスのそれ以前と異なる最大の特徴は、ヨーロッパ人とユーラシアンのカテゴリーがその他の項目の中のサブ・カテゴリーとなったこと位で、「マレー人」「中国人」「インド人」という大カテゴリーはそのまま現在も受け継がれているのである。

現在のマレー人アイデンティティの二大シンボル（イスラーム・マレー文化）の基盤が、16世紀のマラッカ王国にあることは間違いない。本来マレー人「ムラユ」という語は、伝説でアレキサンダー大王の子孫がスマトラのパレンバン近くに築いた王朝の一族をさす言葉であったらしい。そこから、ムラユというのはその王朝の血統（bangsa）に連なる子孫をあらわす言葉になり、これに忠誠をつくす人々はムラユの子達（anak Melayu）と呼ばれるようになったという⁽²⁰⁾。すなわち、もともとは、ムラユという語は支配者とのパトロン＝クライアント関係にある人々の血縁的集団アイデンティティをあらわす言葉であったのである。東南アジア島嶼部にはすでに8世紀から中国やアジアに向かうアラブ人やインド人ムスリム商人の船が出入りしていたが、支配層がイスラームに改宗しはじめるのが、13世紀頃、庶民レベルでの改宗が進行したのが15世紀以降であった。従来からの東南アジア島嶼部の経済基盤であった海洋交易ネットワークの維持と国家統合の進展過程において、この間イスラームへの改宗が重要なファクターになったのである。マラッカ王国では、15世紀初めに王族と貴族の改宗が進んだが、これが定着するのは、15世紀半ばのタイ国との抗争がジハード（イスラームの聖戦）と意味づけられてからであるとされている。以後スルタンと血縁的紐帯で結ばれているムラユの子達も、次第にムスリム

としてのアイデンティティを共有するようになり、イスラームは王権を支える正統的政治権威となっていったのである⁽²¹⁾。こうして、16世紀以降の歴史の流れの中で、ムスリムになるということ (masuk Islam) はマレー人になるということ (masuk Melayu) と同意義語となり、従来の血縁的紐帯から離れて拡大していったのである⁽²²⁾。

したがって、宗教は信仰というよりは、むしろ帰属意識の核としてのこの地域で重要視されたのである。この傾向はイギリス人官僚が困惑させられたように、20世紀初頭の独立以前のマラヤにおいては一般的感情であった。その典型的な例が「マレー人文学」の祖といわれるアブドゥッラーである。彼は、シンガポールの建設者ラッフルズに秘書として雇われ、後年自分の経験を確かなマレー語で『アブドゥッラー物語』として表現した人であるが、インド系ムスリムとマレー人の混血であるジャウィ・プラナカンの出身である。彼自身はジャウィ・プラナカンとして自己を意識し、生涯マレー人としての自意識はなかったようであるが、マレー語とイスラームを通じてマレー文化にしっかりと繋がれている自分自身は自覚していたようである。そして彼の子供たちは、疑うこともなくマレー人としてのアイデンティティを持っていくのである⁽²³⁾。

こうした包含概念としての「マレー人」概念は、イギリス人の植民地統計官にはよく理解できない頭痛の種であったことは既に見た通りである。イギリス人官僚は自身の常識に照らして、これを「国民国家」の基盤となるような「文化と言語を紐帯とした固定的な民族」として捉えたようである。そして、一旦これが行政制度の枠の中に位置づけられるや、現地の人々の考えからずれたまま、ヨーロッパ的な意味での民族概念として成立してしまったのである。しかし、マレーシアが植民地のままであったのなら、こうしたずれは、それほど現地の人々に影響を与えることはなかったであろう。問題はむしろ植民地マラヤ連邦が国民国家マレーシアとして独立した後起こることになる。すなわち新しい「国民国家」マレーシアの基盤となるべき「国民」とは一体誰なのかということが重要になるからである。

20世紀初頭のイギリス人統計作者の「レイス」概念は、生物学的概念よりは、国民国家概念であった。かれらが bangsa という語で質問して、期待している答えというのは、「どの国民国家に属しているのか。」という問いにたいするものだったのである。しかし、まだ国民国家が形成されていない東南アジア諸国ではこの問いは当然人々にとって訳のわからぬものであったろう。そのため、統計官は、個々人の自己アイデンティティに基づく申告により統計をとることにしたのであるが、それによると当時はムスリムに改宗した中国人は「マレー人」としての自己認識されていることが指摘されているのである⁽²⁴⁾。

独立後の1970年の統計では、それ以前の統計の時に使われたレイスの訳の bangsa に変わって、コミュニティ・グループという概念が mashrakat (komuniti) という語に置き換えられたのであるが、普通の人々が馴染みのない外来語の訳語の意味を正確に理解できたとは思えない。調査者はその説明に結局は bangsa というような言葉を使ったであろう。1980年の統計ではその経験によってか、質問は“Apakah kumpulan kuterunan, komuniti atau loghet anda? (どのような民族, コミュニティ, または言語集団に属していますか。)”という質問で行われたのである。しかし、質問の形式は変わっても、第2節で述べた如く結局は「マレー人」「中国人」「インド人」の大カテゴリーの中で、マレー半島ではオラン・アスリやインドネシア人を含み「マレー人」人口を増やす一方、ムスリムであろうが「中国人」「インド人」を別カテゴリーとして排除し、オラン・アスリ人口の多いサバ、サラワクでは、かれらを分割し、全体として「マレー人」

人口のパーセンテージをすこしでも増やそうとしてカテゴリー操作による涙ぐましい努力がされているのは明白である。そして、この努力は、一にも二にも、「国民国家」マレーシアの「マレー人」を主体とした形成のために他ならない。マレーシアは、一つの文化で結ばれた人々が一定の領域を占めた国家を持つというヨーロッパに誕生した「国民国家」の定義にあった「マレー人」主体の国家を今まさしく形成しようと努力している最中なのである。独立以前のカテゴリー用語の「レイス」を独立後に「エスニック・グループ」、「コミュニティ・グループ」と変えても、統計形式も意味内容はそのまま変えずに継承している理由もここにある。なぜなら、イギリス人統計官の考えていた「レイス」概念こそ「国民」概念に合致したものであったからである。「レイス」「エスニシティ」「コミュニティ」と時代の変化により名称は変化しても、その内容として求められているものは同じなのである。その意味で、今日のマレーシアの人口統計に表れている「マレー人」概念、そしてマレーシア憲法に定義されている「マレー人」の成立は、マレーシアにおける「インド人」や「中国人」の成立と同じく比較的近代、否むしろ20世紀に入ってからイギリスの行政制度を通じて確立されていき、独立後の現在只今も形成強化中のものなのである。

しかし、国民国家とは、本来はすでにハンス・コーンが1955年に述べているごとく人々の一つの政治共同体であろうとする collective will に他ならないはずである⁽²⁵⁾。エスニシティであろうが、コミュニティであろうが、国民国家であろうが、民族、またはレイスという用語を使おうが人間の形成している政治的集団は決して原初的な文化的核を中心とした固定的集団と無条件に一致するものではない。その時々政治社会状況の影響を受け組み替えられていくものなのである。したがって現実の民族問題の中でこれらの言葉が使われている時には、その実体を定義しようとしても無駄なのであり、それを実体化しようとする意志と環境に注目すべきである。マレーシアの現在の人口統計をめぐる諸矛盾はとりもなおさず、エスニシティというイディオムの中で経済発展によるパイの配分をめぐる諸個人のゼロサム・ゲームが「マレー人」「非マレー人」を中心として展開している政治経済状況の反映である。そして、このような状況は、マレーシアの経済発展が産み出した別の側面、各民族内部のエリートと大衆の経済的乖離の増大という現実を隠蔽するのに役立つのである⁽²⁶⁾。

国民国家内部の多様性を否定する形で国民形成が続く限り、1969年のメイ・サーティーン事件のような民族問題が生じる可能性はなくならない。しかし、マレーシアの事例は多民族が共存するが故に民族問題が生じるのではない事を我々に示唆している。様々な民族集団の宝庫であるこの地域が将来多様な価値の共存を許容する多元的社会を形成できるかどうか、あるいは民族問題の宝庫になるかどうかは、政治的枠組のあり方に大きく依存しているのである、

〈注〉

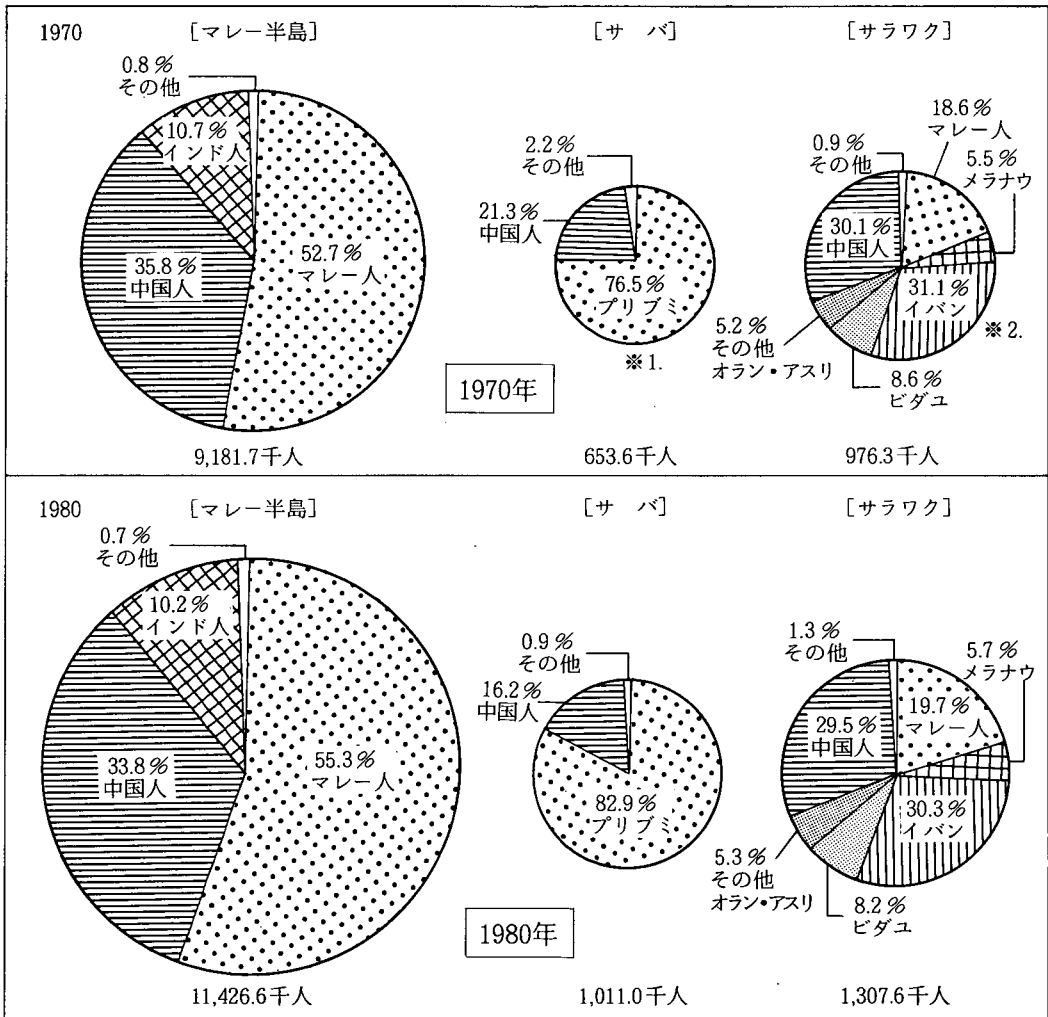
- (1) J. S. Furnival, *A colonial Policy and Practise : A Comparative Study of Burma and Netherlands India*, Cambridge Univ. press, 1948年参照。
- (2) エスニシティ理論の批判については、田村愛理「マイノリティ・エスニシティ・アイデンティティ」『平和と宗教』庭野平和財団平和研究レポート No. 4, 1985年
- (3) 例えば Arendt Liphart, *Democracy in Plural Society : A Comparative Exploration*, Yale Univ. press, New Haven, 1977年はその代表である。
- (4) 田村愛理「多元社会の分析視点：マレーシア研究を事例として」『アジア研究』32巻3・4

- 合併号, 1986年1月を参照されたい。
- (5) マレーシアにおけるインド人の政治運動については, 田村愛理「マラヤ・インド人のアイデンティティ模索: 1920~30年代の初期ナショナリズムの分析」『学習院史学』20号 1983年, Michael Stenson, *Class, Race, Colonialism in West Malaysia: The Indian Case* Univ. of British Columbia Press. Vancouver, 1980年等がある。
- (6) この点の指摘については, Judith Nagata, *Malaysian Mosaic: Perspective from a Poly-Ethnic Society*, Univ. of British Columbia Press, Vancouver, 1979年に負うところが多い。
- (7) マレーシア通史および基本的政治経済構造については, 萩原宜之『マレーシア政治論』弘文堂 1989年を参照されたい。
- (8) だが, ブルネイは石油利権をめぐる財政収入の話し合いがつかずに結局不参加となった。また, マレーシア結成にたいしては, フィリピンがサバの領有を主張, インドネシアはボルネオの独立を要求するブルネイ人民党を支持し, これと対立した。
- (9) 1969年5月13日に起きたこの民族間暴動はメイ・サーティーン事件と呼ばれる。この年の総選挙で連合党の勢力は後退し, 中国系住民が中心の野党の民主行動党や中道革新系の人民運動党が伸長した。連合党政権下で特別の権利を保証されてきたマレー系住民の不安が高まる一方, 中国系の意気が上がり, マレー人の不安を増幅させる街頭行動に出た。その結果怒ったマレー人 crowd は中国系住民を報復とし襲撃し, 流血の惨事となった。6000人が避難し, 死亡者は178名と公表された。
- (10) *Population and Housing Census of Malaysia: Laporan Am Banci Penduduk (General Report of the Population Census)*, 1970, 1980, Department of Statistics Malaysia, Kuala Lumpur.
- (11) Judith Nagata, *The Reflowering of Malaysian Islam: Modern Religious Radicals and the Roots* Univ. of British Columbia Press. Vancouver, 1984年. 195頁参照
- (12) 現代マレーシアにおける政争については, 田村愛理「マレー・ナショナリズムにおける政治組織とシンボル操作: マレー性/イスラームをめぐる政治的集団形成の分析」『アジア経済』29巻4号, アジア経済研究所, 1988年を参照されたい。
- (13) このような主張には, Mohd. Aris Othman, *The Dynamics of Malay Identity*, Fakulti Sains Kemasyara Katan dan Kememanusiaan, Monograph 7, Univ. Kebangsaan Malaysia 1983年がある。これはマレー人とはアラブ人, インドネシア移民, 改宗中国人等すべてのマレーシアのムスリムを包含する概念であり, ムスリムである限りこれらの人々の間には基本的差別はないとする政府の公式的立場をいわば代弁するものである。
- (14) マラツカの歴史については, Meraka: *The Transformation of A Malay Capital c1400-1980*, ed. by Kernial Singh Sandhu, Paul Wheatley, Institute of Southeast Asian Studies, Oxford Univ. Press. 1983年がある。
- (15) Charles Hirschman "The Meaning and Measurement of Ethnicity in Malaysia: An Analysis of Census Classifications" *Journal of Asian Studies*, 46巻3号 1987年8月号
- (16) 1970年, 80年のセンサスでは全く同じ意味でオラン・アスリというマレー語が使われている。

-
- (17) Hirschman, 前掲論文 564—5 頁。統計官は大文字の Race 「レイス」と小文字の race レイスを使いわけている。
 - (18) 「怠け者のマレー人」神話の醸成については, Syed Hussein. Alatas, *The Myth of Lazy Native*, Frank Cass London, 1977 年を参照されたい。
 - (19) その意味でレイスとはもともとの意味はナショナリティに似たものであり, 多少肉体的には外見に差はあっても, 共通の祖先を持つ文化集団を表すものであった。その意味がいわゆる生物学的人種と接近してくるのは, 19 世紀後半からである。
 - (20) Virginia Matheson "Concepts of Malay Ethos in Indigenous Malay Writings", *Journal of Southeast Asian Studies* 10 巻 2 号, 1979 年 9 月 369 頁
 - (21) このようなパトロン—クライアント関係については, Syed Hussein Alatas "Feudalism in Malaysian society: A study in Historical Continuity" *Civilizations* 18 巻 4 号 1968 年を参照されたい。
 - (22) J. Nagata 前掲書 *The Reflowering*……12 頁
 - (23) 中原道子解説『アブドゥラー物語』東洋文庫 392 平丹社 1980 年を参照されたい。
 - (24) Hirschman, 前掲論文 565 頁
 - (25) Hans Kohn, *Nationalism: Its Meaning and History* rev. ed. Van Nostrand Reinhold, New York, 1965 (初版 1955) 年
 - (26) 西口清勝「現代マレーシアのコミュニズムと所得分配構造」『アジア研究』32 巻 2 号 1986 年 10 月号, 萩原宜之, 前掲書, 第 III 部 2 章等を参照されたい。
-

憲法 160条(2)
マレー人の定義
i) ムスリム
ii) 日常的にマレー語を話す
iii) マレーの習慣に従う

表 I 1970年, 1980年のマレーシア地方別エスニック人口構成比表



1980年マレーシア人口統計報告18頁より

※ 1. 1970年人口統計においては「カダザン」「ムルット」「バジャウ」「マレー」「インドネシア」「その他オラン・アスリ」というカテゴリーに分別されていた。(筆者注)

※ 2. 1970年人口統計において「イバン」「ビダユ」は「海陸ダヤク」として同一カテゴリーであった。(筆者注)

表 II 1871 年. 1921 年. 1957 年の人口統計とカテゴリー

1871(SS)	1921(FMS)		1957
Europeans and Americans (18 subcategories)	The European Pop. by Race (20 subcategories)	The "Other" Pop. by Race	Malaysians
Armenians	Eurasians	Annamese	Malays
Jews	The Malay Pop. by Race	Arabs	Indonesian
Eurasians	Malays	Armenians	All Aborigines
Abyssinians	Javanese	Filipinos	Negrito
Achinese	Banjarese	Japanese	Semai
Africans	Boyanesse	Jews	Semelai
Andamanese	Bugis	Negros	Temiar
Arabs	Achinese	Persians	Jakun
Bengalees & other Natives of India not particularized	Korinchi	Siamese	Other Aborigines
Boyanesse	Mendeling	Sinhalese	Chinese
Bugis	Bornean Races	Turks (Asiatic)	Hokkien
Burmese	Sakai	Not Returned	Tiechiu
Chinese	Other Races		Khek (Hakka)
Cochin-Chinese	The Chinese Pop. by Tribe		Cantonese
Dyaks	Hokkien		Hainanese
Hindoos	Cantonese		Hokchia
Japanese	Tie Chiu		Hokchiu
Javanese	Hailam		Kwongsai
Jaweepekans * 1	Kheh		Henghwa
Klings * 2	Hok Chiu		Other Chinese
Malays	Hok Chia		Indians
Manilamen	Hin Hua		Indian Tamil
Mantras	Kwongsai		Telegu
Parsees	Northern Provinces		Malayali
Persians	Others & Not Returned		Other Indian
Siamese	The Indian Pop. by Race		Others
Sinhalese	Tamil		Eurasian
	Telugu		Ceylon Tamil
	Malayali		Other Ceylonese
	Punjabi		Pakistani
	Bengali		Thai (Siamese)
	Hindustani		Other Asian
	Pachan		British
	Gujerati		Other European
	Maharatta		Others (not European or Asian)
	Burmese		
	Gurkha		
	Other and Indians		
	Unspecified		

C. Hirschman 前掲論文 APPEND IX より

* 1. ジャウィベカンとはインド・ムスリムとマレー人女性の間の子孫を指す。ジャウィブナカンとも言う。(筆者注)

* 2. クリンは南インドのカリंगा (Kalinga) 地方から移民してきたイスラム教徒グループ。(筆者注)